

食卓が
勉強机

吉村 幸代

「学校では男女は平等だと教えらるるのに、家へ帰ると母が我慢を強いられることだらけの男女不平等。学校と家庭のあまりの落差に、戸惑いながら育ちました」。四十代女性の発言に、多くがうなずいた。「平塚らいてうの家」の視察研修を終えて上田市から松本市へ帰るバスの中、意見交換した際のことである。

私は、地区人権啓発推進協議会の副会長を務めている。昨春、同和教育のオーソリティー

である前会長が退かれた。さして、引き継いだ我々には何ができるやら。新会長が提案した。「身近な人権問題を取り上げよう。家庭や職場や町会で、誰もが問題意識を持つようなことを」。男女共同参画問題を重点テーマに決めた。

「男にスカートをはけと言つのか」。こんな考え方を推進

である前会長が退かれた。さて、引き継いだ我々には何ができるやら。新会長が提案した。「身近な人権問題を取り上げよう。家庭や職場や町会で、誰もが問題意識を持つようなことを」。男女共同参画問題を重点テーマに決めた。

長野県は、自治会長に占める女性割合が二〇一〇年までに三〇%を上回ることを目標としているが、本年度は〇・八%にと

男は度胸、女も度胸

するから、世の中がおかしくなったんじゃないのか。そんなふうに言つてのける人が、今もつて、どこにも一人や二人はいらう。男女共同参画社会基本法の公布・施行から十年。この国において、法が目指す理想は、どこまで現実となり得たのだろうか。

不可解なことは身近にもあり、男女が織り成す有意義な活動が、地域活性化や存続の鍵であることではない。個性と能力が発揮できる新しい社会を、男性には理解と協力を、女性には自覚と努力が求められているといえよう。

男は度胸、女も度胸。

男女共同参画社会について思いを巡らせる時、いつも私は問う。理由を尋ねると、たった一市